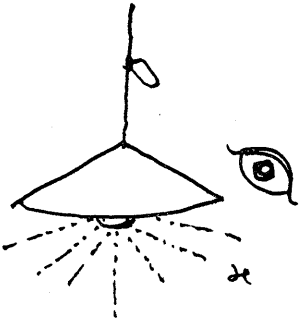
でんき

文と絵　柴岡治子

お母さんは足が悪いから、これから夜のおべんじょには一人で行くようになさいねと言われました。おばさんの幼稚園の頃です。

おばさんはその晩もおべんじょに行きたくなって目がさめました。昼間のお母さんの言葉を思いだしました。ソーッと起きて、急に目がみえなくなった人のように、壁をつたっておべんじょの前まで行き、何だかちっともこわいと思わないでおしっこをして、また寝室に帰って寝ました。



ずい分昔のことだったし、小さな家だったし、おべんじょには電気はついていませんでした。壁に電気のスイッチなんてなかった頃のことです。お母さんは眠っていて知らないと思っていましたが、やっぱり気がついていました。そしてびっくりしました。まさかその夜から、おばさんが一人でおべんじょに行くとは思わなかったのです。

デンキをつけてからとお母さんが言ったかどうか、おばさんは覚えていませんが、お母さんは急いで電気をつける工事をたのみました。

だけどおばさんは、いくら思い出してみても、こわかったような気持ちを少しも思い出しません。よくおべんじょの前と後をまちがえなかったし、落っこちなかったなあと思ったりするだけです。昔のおべんじょは水洗などではなく、深い暗い穴のようでしたから。

どうしておばさんはこわくなかったのかな。